

新型コロナウイルス感染症に対する日本赤十字社の活動

Activity Report 2020.2~7



©Atsushi Shibuya/JRCS

国内外で急速に感染拡大した新型コロナウイルス感染症。

わたしたちは、
クルーズ船での集団感染などに対する医療チーム派遣をはじめとし、
感染患者の方々を赤十字病院へ受け入れ、
まさに最前線でいのちを救う医療活動を続けてきました。

日々、危険と隣り合わせのなかで、
お寄せいただく皆さまからのあたたかいお気持ちに、
わたしたちは、何度も何度も、励まされました。

感染拡大を防ぎ、皆様の安心と安全を守るため、
いのちを救う活動を、わたしたちはこれからも続けていきます。

横浜港に入港した大型クルーズ船内での集団感染。 未知のウイルスとの戦いはここから始まった。

感染を防ぐ最前線へ、救護班を派遣



新型コロナウイルス感染症の初期段階で、大きな話題となった大型クルーズ船内での集団感染。

日本赤十字社は、厚生労働省からの派遣依頼に基づき、2月10日から3月1日までの間、救護班など、延べ142名の職員を現地に派遣し、乗員乗客3,711名の健康の確保等に努めました。

帰国者、下船者の経過観察を支援

クルーズ船での活動と並行して、中国武漢市からチャーター便で帰国した方々の経過観察を支援するため、2月7日から3月6日までの間、埼玉県内の一時滞在施設に延べ113名の職員を派遣。施設に滞在された方々の健康相談・健康チェックなどに従事しました。

また、クルーズ船からの下船開始後は、PCR検査陰性の方々の経過観察も同施設にて支援しました。



Interview 感染症専門医が見た「新型コロナウイルス」



●古宮伸洋（こみやのぶひろ）

北海道大学医学部卒業後、長崎大学熱帯医学研究所で熱帯医学を、国立感染症研究所FETPで感染症の疫学を学ぶ。兵庫県民主医療機関連合会や東京都立墨東病院などを経て、2012年から、日本赤十字社和歌山医療センターに勤務。同センター感染症内科部長、感染管理室長も兼任する。

(赤十字NEWS7月号からの引用)

巧妙なウイルスだ。こんなウイルスは他に思いつかない。

重症な肺炎を起こす病原体という側面を持ちながら、ただの風邪のような症状だったり、人によっては無症状で、警戒へのハードルが下がる。このウイルスは、感染の広がりやすさに長けている。

2月12日から横浜港の大型クルーズ船、18日からは武漢からの帰国者の一時滞在施設へ、**救護班の感染症アドバイザー**として参加した。救護班として災害現場に派遣された経験は豊富でも、感染症が流行している大型クルーズ船という閉鎖空間に派遣されるのは、どの救護班も初めての体験だ。感染防護の準備はどうか、から始まり、任務を終えた後どのように病院に戻るかまで、考え得る限りの感染管理のアドバイスを行った。

結果、日赤職員の派遣者数延べ255名から一人も感染者が出なかったのは、救護要員一人一人が感染対策で守るべきことをしっかりやったから。感染症のさまざまな現場を経験している自分でさえ怖いと感じた船内での活動終了後、残念なことに各地で心無い言葉を投げ掛けられた人もいたようだが、胸を張ってほしい。

感染者を最小限にする社会全体の取り組みで、この危機を乗り越えていければ、と考える。

救えるはずの命を救えるのか。 想像を絶する過酷な状況下での命を守る戦い。

予想を超える速さで広がったウイルス



世界中で驚異的な速度で広がった新型コロナウイルス感染症。日本国内でも急速に拡大し、特に東京都では国内最大級に猛威を振るっております。

最前線の医療現場では、想像を遙かに超える感染患者に対して、底をついてしまった医療資材。

危険と隣り合わせの状況下で、多くの不安を抱えながらも、医師・看護師たちは24時間体制の診療を続けてきました。

部下や看護師に、武器を持たずに戦いに行けとは言えない。 前線に立つ医療者を守れなければ、医療は崩壊してしまう。

感染防止に必須の医療資材も底をつきそうな中、そう語ったのは、日赤医療センター呼吸器内科部長の出雲医師。

増え続ける患者の対応に追われた同センターは、新型コロナ患者受け入れの病床を拡張し続け、最終的には3つの病棟（救急集中治療室含む）を丸ごと、コロナ対応の病棟に変えました。

また、救急体制を一部制限し、新型コロナ患者の対応に注力しました。しかし、コロナ感染疑いの患者受け入れ要請は切れ目なく入電、すぐ満床になってしまったため、すべてを受け入れることができません。4時間かけて120院に電話をしましたが、受け入れ先を確保できないケースもありました。



N95マスク、防護ガウン、アイシールド、キャップ、手袋、フル装備で診療にのぞむ出雲医師



武蔵野赤十字病院では、感染を防ぐ医療資材の不足が4月に入ってから一層深刻になり、フェイスガードの付け替える部分を事務用品のクリアファイルで代用したり、事務部長自ら山梨まで車を走らせて3Dプリンターを入手し、感染防護具を院内で自作したりするなど、あらゆる手を尽くして、新型コロナウイルスに立ち向かいました。

事務室内には「止まない雨はない…終わらない流行はない」などの職員を鼓舞するメッセージがいくつも貼られました。

医療従事者を守れ！ 医療従事者を守らなければ感染患者は守れない。

感染防護具を医療従事者の元へ



「医療従事者を守れ！」と檄を飛ばしたのは、当支部の中川原事務局長。過酷な状況下にいる病院スタッフへの支援は急務であったことから、寄せられた資金や物資を活用し、感染者の治療や感染防止に欠かせないマスクや防護服など**約300万点**を迅速に配分するため、何度もトラックを走らせました。

また、武蔵野赤十字病院では陽性患者専用のエリアを設けるほか、専用のトイレも必要としており、当支部が救護所に設置するパーテーションや避難所用のラップ式トイレなどを有効利用。災害救護の備えが、最前線で戦う病院の助けになりました。



さらに、「購入したくてもできない」医療物資の品薄状態が続く中、赤十字ボランティア協力のもと、マスク、フェイスシールド、防護服など**約3万点**を手作りし、各赤十字病院に配分。一般病棟などで使用していただきました。

こうした感染防護具は、感染症病棟のみで使用するイメージがあるかもしれませんが、一般病棟や検査部門でも使用するため、新型コロナウイルス対応には欠かせない物資です。

差別や偏見を防止するために

最前線で感染症に対応し、疲弊していく全国の医療従事者。新型コロナウイルスの感染拡大とともに、医療従事者や感染者への差別や偏見が社会問題となっていきました。

こうした差別や偏見が蔓延すると、ウイルスの封じ込めを困難にしてしまうことから、これを防止するアニメーション動画を作成。

約220万回の再生（7/7時点）がありました。正しい情報の発信に努めることも、医療従事者の支援に繋がると考えております。



Animation

「ウイルスの次にやってくるもの」

もし、感染症流行期に災害が起きたら…
私たちは被災地で何が起こるか、誰よりも痛感しています

先々を見越し、感染症対応は次のフェーズへ



病院には感染患者に加え、多数の負傷者が押し寄せる



住家被害が多数発生し、多くの人が避難所へ

密集した環境となる「避難所」

大規模災害が発生した際、余儀なくされる避難所生活。台風第19号災害の際、ピーク時には避難所は全国で8千か所以上、避難者は23万5千人を超えました。
換気が十分ではなく、人々の密集が避けられない環境では感染のリスクが高まります。

すぐに取り組まなければいけない「備え」

衛生管理のための
救援用資機材の
緊急配備



避難所用テント



ポータブルトイレ

※写真は
イメージです

提供：
日本セーフティー
株式会社

密集した環境となる避難所で、プライベート空間やソーシャルディスタンスを確保できる避難所用テントや、断水・停電時でも衛生面を保つことができるポータブルトイレなどを、事前に各地域に配備しておくことが非常に重要です。

皆様から寄せられた資金を活用し、こうした取り組みも同時に進めてまいります。

皆様からのご支援によって、わたしたちは、いのちを救う活動を続けることができます。
いかなる時もすべての苦しんでいる人に手を差し伸べるわたしたちの活動にご協力をお願いいたします。